



通信

情報誌

バリ
バリ

身近な

BARIBARI
TSUSHIN

2022
NEW YEAR
VOL.114

発行 四国ガス燃料

愛媛県今治市中寺226-1・TEL:0898-32-0725
https://www.shikoku-gasnen.co.jp/

坊っちゃんカラクリ時計

平成6年、道後温泉本館建設100周年記念事業の一環として作られた。午前8時から午後10時までの間、1時間ごとに小説「坊っちゃん」の登場キャラクターが登場する。

春や昔十五万石の 城下かな



正岡子規像

平成27年、道後温泉駅前に建立された高さ3mのユニフォーム姿の青年正岡子規の銅像。



正岡子規が 愛した故郷

(愛媛県松山市)

愛媛県松山市に湧出する温泉「道後温泉」は、日本三古湯のひとつといわれ、代表的な観光地となっている。その道後温泉の近くにある「坊っちゃんカラクリ時計」の側に、野球のユニフォームを着てバットを持った正岡子規の像が静かに座っている。俳句の街としても有名な松山市内には子規の句碑が多くあり、銅像の横には「まり投げてみたき広場や春の草」という句が添えてあった。

正岡子規はいわずと知れた松山出身の俳人であるが、自分の幼名「升」にちなんで「野球(のぼる)」というペンネームを用いたり、野球を題材にした俳句や短歌を数多く詠んだりするほどに野球に熱心であった。ベースボールのルールを紹介し、ピッチャーを投者、バッターを打者、ランナーを走者、フォアボールを四球など、現在でも使われている用語の訳語をつくったといわれる。

また道後温泉「椿の湯」の男湯の湯釜に「十年の汗を道後の温泉に洗へ」という句が刻まれている。温泉と俳句という取り合わせは松山ならではの、これは、松山市出身の後輩が大学を卒業して帰郷する際に子規が贈ったものである。数ある子規の句碑を巡りながら、彼の足跡とその心に触れてみてはいかがだろうか。

ちなみに一時期、松山で子規と同居していた作家、夏目漱石も、小説「坊っちゃん」の中に温泉を登場させている。おそろしく漱石も道後温泉の湯を楽しんでいたのだろう。歴史ある湯はロマンに溢れている。

松山を代表する偉人、正岡子規の世界に触れることができるのが、道後公園の一角に位置する「子規記念博物館」。子規が生まれた頃の時代背景から、生い立ち、生涯や道後温泉の歴史も学ぶことができ、彼が生きた時代を詳しく知ることができる。



松山市内までの交通【自動車道松山自動車道経由】

徳島ICから(徳島自動車道経由)約2時間30分
高松ICから(高松自動車道経由)約2時間30分
高知ICから(高知自動車道経由)約2時間10分



道後温泉本館

約三千年の歴史をもつ道後温泉は「万葉集」「日本書紀」「源氏物語」にも登場する日本最古の名湯。道後温泉本館は1994年に国の重要文化財として指定され、現在は部分営業しながら保存修理工事中。



道後温泉「椿の湯」

道後温泉本館の姉妹湯。昔この地を訪れた聖徳太子が、咲き誇る椿の美しさを褒め称えたという話からこの名が付いたという。

松山で生き続けている。志は多くの宝となり、今も...



俳都松山俳句ポスト

昭和43年5月に松山城へ第1号の俳句ポストを設置以来、主要観光地や道後温泉のホテル・旅館、路面電車や四国八十八ヶ所霊場のお寺などさまざまな場所に設置されている。



道後商店街のお土産

道後温泉駅から道後温泉本館まで続く商店街、道後商店街(道後ハイカラ通り)で購入できるお土産。グルメ・カフェ・足湯などの観光スポットが充実している。



正岡子規は、年号が明治となる二年前の慶応三年(一八六七年)松山藩士正岡常尚の子として松山に生まれた。幕末維新動乱真只中である。三十四歳という短い生涯を終えるまで、近代文学の歴史に輝かしい功績を刻み続けた。子規の文学革新運動は夏目漱石、河東碧梧桐、高浜虚子、伊藤左千夫、長塚節らによって受け継がれ、のちの時代の文学に大きな影響を与えたといわれる。

「春や昔十五万石の城下哉」。江戸時代には、より繁栄していた春の松山の姿をうたったこの代表句は、明治二十八年に子規が戦地に赴く直前につくられた句である。周囲の反対を押し切り記者

として日清戦争に従軍するも、結核が悪化。以後、病床において俳句や短歌の革新に力を注ぐようになる。俳句は当時から庶民に親しまれてはいたが、前時代の影響を引きずったありきたりなものが主流であった。子規は旧派を排し、実物・実景をありのまま具象的に写し取る「写生」を持ち込み、新しい俳句を提唱する。病の中においても不屈の意志力をもって作品を生み続け、その後の近代俳句、近代短歌史全体に計り知れない影響を与えた。また、子規は文章の革新にも取り組み、ありのままを表現する「叙事文」を提唱した。今私たちが日常的に読み書きしている文章は、その大きな流れ

のうえにある。近代日本語の発展に多大な貢献をした子規の、人間らしい「ことば」に触れながら、彼の生きた明治という時代に思いを馳せるのもいいだろう。子規が十五歳まで暮らした家を復元した「子規堂」は正岡家の菩提寺である正宗寺の境内に建つ。直筆原稿や遺墨、遺品などを展示しており、勉強部屋や愛用の机などから当時の面影を偲ぶ。子規堂の「俳句ポスト」からは誰もが自由に句を投函できるようになっていた。定期的に回収され、俳人によつて選句されているそうだ。この「俳句ポスト」なんと松山市内に九十か所以上設置されている。近年では県外や



松山市立子規記念博物館

近代俳句の基礎を築いた子規の生涯に触れることのできる博物館。実物資料や映像機器、松山市在住の創作人形作家 森川真紀子氏の創作人形など、およそ300点の資料を展示。

開館時間: 5月1日~10月31日: 9:00~18:00(展示室入場は17:30まで)
11月1日~4月30日: 9:00~17:00(展示室入場は16:30まで)
料金: 個人400円/団体(20人以上)320円 特別展観覧料は別
小中高校生は無料
65歳以上の高齢者個人200円/団体160円(証明書提示要)



子規と野球

学生時代にベースボールを知り、熱中した子規。野球用語を日本語に訳した功績により、平成14年には野球殿堂入りを果たしている。



子規の上京

叔父の加藤拓川を頼って三津浜の港から上京する子規の様子。上京し受験勉強のために共立学校(現・開成高等学校)へ入学、その後東大予備門へ入学し、そこで夏目漱石と同窓になり生涯の友となる。



絶筆三句と子規記念博物館へちまの糸瓜棚

34歳でこの世を去った子規。紙をはりつけた画板を妹の律に持たせ、仰臥しながら俳句三句をしたためた。炭を切る素効があるといわれる糸瓜にまつわる三句の絶筆を映像で展示。



正岡子規誕生邸址

伊予鉄松山市駅近くにある花園町の地に生まれた子規の誕生邸址にも俳句ポストが設置されている。



子規堂

子規が15歳まで過ごした邸宅を模して建てられた木造平家建の建物。子規が使っていた机や遺墨、遺品、写真などを展示。

